

漢方の考え方について

近年は漢方薬が処方されることが多くなり、服用する機会が増えました。西洋医学と東洋医学が互いに長所と短所を補い融合しながら、病気の治療をすることが浸透しています。しかし、普通の薬と形態や味が何か独特で違います。薬の説明文書の効能が自分の症状と違うと感じた人も多いでしょう。

漢方薬は約2千年前の漢の時代（紀元前後）に体系化されたものが日本に伝わって変化したもので、西洋医学は約3百年前の江戸時代中期頃から徐々に伝わってきました。医学の発祥や歴史が違うため、薬自体や治療の考え方が全く違います。西洋医学は病名に基づいて治療を行います。漢方薬は漢方医学的病態「証」に基づいて処方が決まります。

病名が同じでも、体質や体型、抵抗力、自覚症状などは人によって異なります。その違いを「証」というものさしで判断します。漢方薬は一人ひとりの体質や病気の状態を見きわめながら、多角的に判断する個人差を重視した治療薬です。そのため、病名が同じでも漢方処方が違ったり、反対に違う病気でも同じ漢方処方だったりします。

証の判断は多岐に渡りますが、今回は漢方の考え方を理解するために「陰陽」「虚実」「気血水」について説明します。

陰陽 病性（病気の性質）

自然界では {天と地} {太陽と月} など相反する2つの事象が存在し、これらがバランスよく調和して成り立っており、人体においても同様の調和が保たれて健康が維持されると考えます。その調和が乱された場合、生体の修復反応の性質が総じて熱性・活動性・発揚性のものを陽証といい、寒性・非活動性・沈降性のものを陰証といいます。例えば風邪をひいた場合、発熱・頭痛のような症状が強ければ陽証であり、熱感がなく青白い顔色を呈する場合は陰証です。

陽証	陰証
暑がり、薄着を好む	寒がり、厚着を好む
寒冷刺激を好む	温熱刺激を好む
顔面が紅潮	顔面が蒼白
高体温傾向	低体温傾向
舌面が紅・舌苔が乾燥	舌面が淡白・舌苔が湿潤
便臭が強い	便臭が弱い
肛門の灼熱感を伴う下痢（しぶり腹）	肛門の灼熱感を伴わない不消化の下痢
尿の色が濃い	薄い色の尿が頻回に出る

虚実 病勢（病気の勢い）

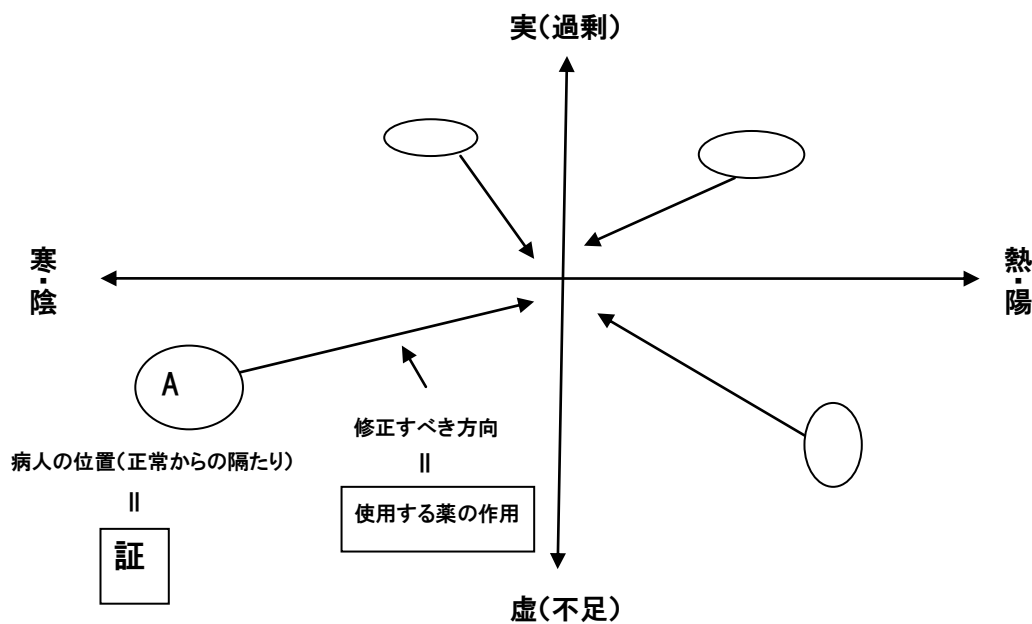
生体が外乱因子によって歪みを受けた際、その修復反応のために気血の力が動員されます。気血の力が高反応で旺盛であれば実証、低反応で弱ければ陰証と判断します。病気をはねかえすふだんの健康度が高ければ実証で、低ければ虚証が目安になります。

全身的な虚実の評価

実証	虚症
骨格ががっちり・筋肉質で堅太り	骨格が華奢・やせ型か水肥り
眼光・音声に力がある	眼光・音声に力がない
脈が充実	脈が無力
腹力が充実	腹力が軟弱
皮膚の色つやが良い	皮膚の色つやが悪い

局所的な虚実の評価

実証	虚症
皮膚の発赤・腫脹・疼痛	自然発汗の傾向
激しい疼痛（胸痛・腹痛など）	盗汗（寝汗）
疼痛部位の筋肉の硬結（しこり）	胃部排水音
便臭の強い便秘	便臭の少ない便秘
圧痕が速やかに回復する浮腫	圧痕が回復しにくい浮腫
牛角胃（すらりとした形の胃）	胃下垂・内臓下垂



各証に適する処方はずべて原点へ
中庸へ向けて生体の歪みを修正する
方向で作用する

気血水

生体の恒常性は「気」「血」「水」の3要素が体内を循環することによって維持されると考えます。「気」とは、生命活動を営む根源的なエネルギーであり、精神活動を含めた機能的活動を統括する要素です。生体の物質的側面を支える要素が「血」「水」です。気の働きを担って生体を循環する赤色の液体が「血」で、血液と、血液が体中に栄養分をめぐらせ、老廃物を回収する働きそのものを意味します。生体を滋潤する無色の液体（消化液、唾液、汗など…）が「水」です。

例えば、気が不足の「証」と診断すればそれを改善する漢方薬が処方されます。「血」「水」についてもどのような「証」なのか見極め判断します。